

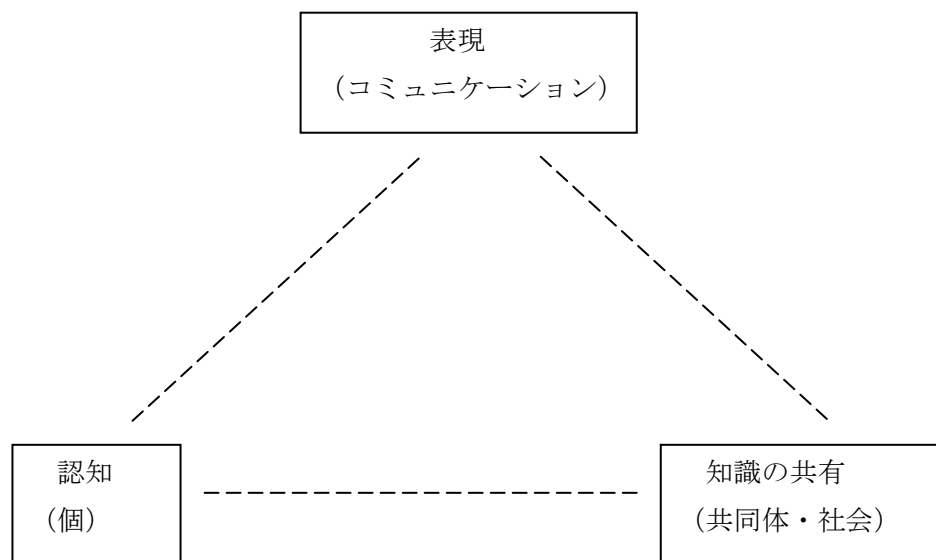
ステレオタイプ座談会にむけて

金水 敏

2006/06/20

ステレオタイプを支えるシステム

文学を含む、さまざまな表現の営為において、「役割語」を含む、ステレオタイプを位置づけるためには、次のようなシステムを仮定するのが便利である。



ステレオタイプは、まず外界の認知(cognition)の偏向として出発する。対象の諸特性と、特定のカテゴリーを過剰に結びつける心理的現象である。これは、あくまで個人の心の現象であるが、ステレオタイプとなるためには、社会における知識の共有がなければならない。この知識の共有を基盤として、対象の表現が成立する。さらに、そのような表現を享受することにより、あらかじめ偏向をもった認知的傾向が育てられるという現象が生じる（これが狭義のステレオタイプであろう）。ここから、現実とは独立にステレオタイプが成長し、共同体の中に継承されていく契機が生まれるのである。拙著における「役割語」の定義は、次のようなものである。

ある特定の言葉遣い（語彙・語法・言い回し・イントネーション等）を聞くと特定の人物像（年齢、性別、職業、階層、時代、容姿・風貌、性格等）を思い浮かべることができる時、あるいはある特定の人物像を提示されると、その人物がいかにも使用しそうな言葉遣いを思い浮かべることができる時、その言葉遣いを「役割語」と呼ぶ。

(金水 2003, 205 頁)

この定義は、個の認知の側面を強調した書き方になっているが、知識の共有や表現を含めて見ていく必要がある。

さらに、近代的な文学的営為とは、作者という「個」の表現活動と見られているが、享受者としての読者共同体の存在を抜きにしては成立し得ない。この点は見過ぎされがちであるが故に、強調しておきたい。

ステレオタイプと他者性

ステレオタイプは外界における他者の認知に出発する。従って、ステレオタイプとはまず、“他者”の表象と位置づけておきたい。ここで“他者”を括弧でくくるのは、対象がステレオタイプの的に捉えられ、表現されている限り、現実的な他者とは出会うことが出来ないという認識に基づいている。ステレオタイプは、他者と出会う必要をなくす、あるいは出会うことを回避する装置と言ってもよいであろう。この点は、作品の大衆性・通俗性に関わる部分がある。

ステレオタイプとペルソナ

ステレオタイプは上に述べたように、“他者”の表象であるが、表現者は他者にとっての他者であるが故に、自己の表現もまたステレオタイプ性を帯びざるを得ない。いわゆる“ペルソナ”の中にステレオタイプが紛れ込むのである。これは日常生活におけるコミュニケーションにおいてそうである（例「ぼく」と「おれ」の選択、定延氏の発話キャラクター）と同時に、当然ながら、文学的表現においても深刻な問題となる。

ステレオタイプと大衆性・通俗性

ステレオタイプに多く依存した作品は、分かりやすく、それ故に大衆的・通俗的である。清水義範氏のことばを借りれば、「B 級作品」である。このことの一面は、他者性の問題と通いつている。現実的な他者とは、割り切れず、理解しにくく、多面的であり、時にグロテスクでさえある（cf. サルトルの「実存」）。優れた作品（「A 級作品」）とは、そのような他者性をはらんだ作品のこと、とひとまず言うことができる。そのような作品は、読者に違和感・不安感を与え、宙づりにする。

しかし、表現が享受者としての共同体に支えられている限り、ステレオタイプの表現を避けて通ることは出来ない。ステレオタイプを利用しながら、どのようにそれを乗り越え、ずらし、亀裂を入れていくか。そこにこそ優れた創作者の手腕が表れるはずである。例えば清水義範氏は、大衆性に基盤をおいた構えを取りながら、そのことにもっとも自覚的な作家と見られるが、清水氏の方略とはどのようなものであるのか。

ステレオタイプと欲望

ステレオタイプは人間の欲望をかき立てる。例えばポルノ小説、性風俗など。このことは、ステレオタイプに真の他者が立ち現れないことと表裏一体である。

パスティッシュの魅力も、このステレオタイプの欲望と関連するところがないか。

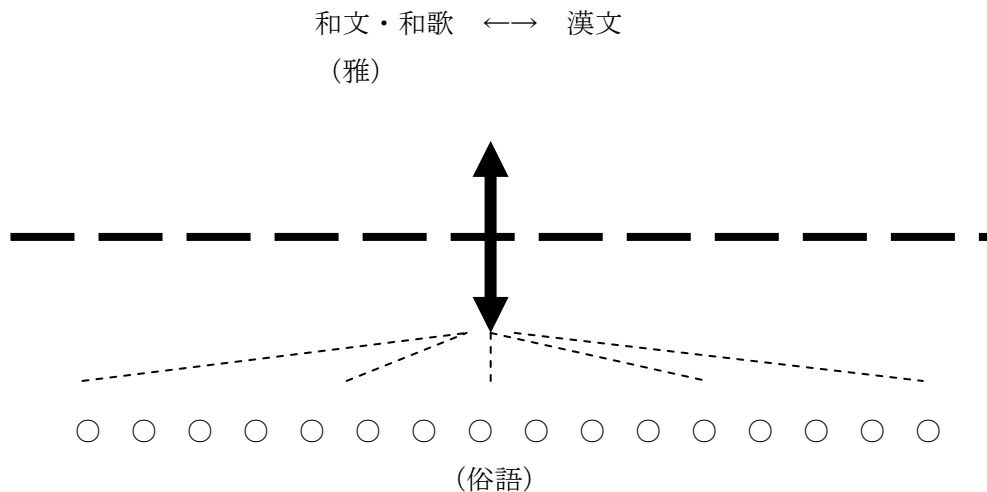
隠蔽されたステレオタイプ

より深刻な問題は、「A 級」の構えを取りながら、根深いステレオタイプに捉えられていることに自覚的でない場合である。近年のジェンダー研究は、さまざまな言説のなかに隠し込まれた性ステレオタイプを暴き出している。

しかし、もっとも気づかれにくいのは、いわば近代文学が作り上げた「誰でもない私」というステレオタイプではないか。さまざまなペルソナをはぎ取っていったその中に、「本当の私」が存在するという「物語」である (cf. 大平健)。例えば「文学する私」は、この物語の一つのヴァリエーションと言えよう。この「誰でもない私」幻想は、後述する、近代文体の問題、特に「標準語」の問題とも通底している。

文体の問題

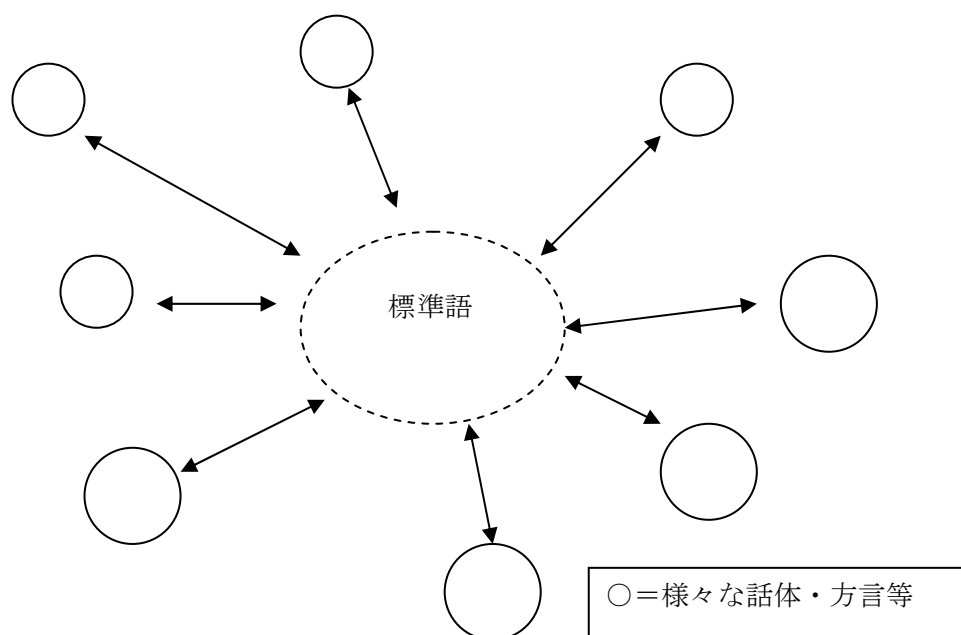
ステレオタイプの人格表現は近世以前にも存在したはずであるが、近代以降との相違点を探る場合に、標準語の問題は極めて中核的であり、先に述べてきた問題群とも深く絡み合っている。



近世以前 (明治 20 年くらいまで)、戯作や歌舞伎に見られるような話体のヴァリエーションは、威信の上下はあったとしても所詮俗語である。これに対して、書きことばとして

の和文・漢文（およびその混淆）は、俗語に対していわば超越的・特権的な立場にあった。大衆芸能の世界でも、浄瑠璃の太夫が地の文を語るときは、登場人物や世界から超越的な立場に立っている。神や幽霊が文語で話すのも、この超越的機能による。和歌と王権の結びつきを想起してもよい。現代でも、文語の持つこのような超越性・特権性の応用はしばしば見られる。

言文一致体完成後は大きく構図が変わる。



言文一致体＝標準語は「誰の声でもあり、誰の声でもない」（山田俊治先生）。隠蔽された「日本語」の「原点」である。特権的でありながら、その存在は自明とされ、普段はその存在さえ気づかれない。むしろ、特徴ある話体（役割語）や方言と対比して、その陰画として気づかれるに過ぎない。先に見た、「誰でもない私」は、原則として、言文一致体＝標準語で描写されることに注意したい。皇室の人々は、「きれいな」標準語でお言葉を述べるのが重要な仕事の一つであり、われわれはそれを自明視しているが、戦前までそのようなことはあり得なかった。超越的・特権的でありながら、自明的と見なされる、「原点」としての存在にふさわしい話体である。

（ただし、文語の威信が実際に失われるのは、戦後のことであろう。それまで、3頁の図と4頁の図の複合のような構図が続いていたか）